

海外養殖魚研究会報 第43号

発行：海外養殖魚研究会

平成2年5月25日

事務局：〒102 東京都千代田区麹町4-5 第7麹町ビル555号

(株)国際水産技術開発内 TEL:03-234-8847

FAX:03-239-8695

第43回海外養殖魚研究会が、平成2年5月22日(火)午後5時半～7時半に、国際協力事業団 47階 第12B会議室で行なわれました。

今回は、アフリカ諸国の水産事情をテーマに、(株)建設企画コンサルタントの並里次雄氏に、ニジェール国の水産事情について、また、O A F I C (株)の升田清氏に、ケニア、コンゴの水産事情について講演をお願いしました。

研究会参加者は、下記の通りです。

並里次雄、三島譲二(建設企画コンサルタント)、升田清(O A F I C)、佐々木直義、前川晶(国際協力事業団、水産協力室)、木谷浩(国際協力事業団、国際総合研修所)、白旗総一郎、井手口良一(海外漁業協力財団)、小林茂夫(D & Aエンジニアリング)、島津祐右、進藤直三(極洋)、鈴木重則(東京水産大学、資源管理学科)、加福竹一郎、岡田秀之、杉本正志、川口正徳、曽根重昭(国際水産技術開発)

講演に先立ち、加福竹一郎会長より研究会の開催が遅れたことについてお詫びがあった。なお、講演後に今後の計画について皆様に計りたいことがある。今回は、J I C Aの佐々木直義氏の計らいでこの会場を使わせていただくことができ感謝しています。

講演中、Huisman E. A. (Ed.) 1986 Aquaculture Research in the Africa Region が回覧された。

テーマ 1. ニジェール国の水産事情

並里次雄(建設企画コンサルタント)

参考資料として、西アフリカにおける気候の季節変化、地域別年間降水量の年変動、ニジェール国の地形概念図、月別降水量、1987年度の地域別漁業生産量、月別漁業生産量、水産物加工、輸出入量の年変動、淡水魚魚種一覧表等が配布された。

ニジェール国はサハラ砂漠南部のサヘル地帯に位置し、面積127万km²、人口約600万人の内陸国である。1980年代初期は、7～8千トンの漁獲があったが、1983年からのアフリカ地方を襲った旱魃によって水位が著しく低下し、その影響から2～3千トンと3/1弱程度に減少し、現在若干の回復傾向がみられるものの、まだ以前のレベル

ルにまでは回復していない。雨季と乾季がはっきりしており川幅の増減が激しいが、漁獲量の季節変化は、最大、最小月の差が2倍前後とそれほど大きくない。漁獲物は、9割が鮮魚として出荷され、その他は、薫製、干物として出荷されている。

重要魚種としては、ナイルパーチ(*Lates niloticus*)、ティラピア(*Oreochromis niloticus*)があげられ、その他種々のナマズ類が漁獲されている。

ニジェール国の水産は、その国土、人口からして、ほとんど経済的な効果はないのが現状である。一応、養殖らしきことを試験的に行なっているが(ティラピアのイセス養殖)、まだ、試験の域を脱しておらず、養殖、漁撈全体を通じて、これから開発して行かなければ成らないのが現状である。

テーマ 2 . ケニア、コンゴの水産事情

升田清(O A F I C)

今年の3-4月、アフリカの4ヵ国をまわってきた。今日は、ケニアとコンゴの水産事情について話す。両国の写真集が回覧された。

ケニア : ビクトリア湖は、ケニア、ウガンダ、タンザニアの3国で分けられている。湖と言うより海と言う感じの広さで、丸くて浅いのが特徴である。今回は、同湖の魚相がナイルパーチの導入により変ってきたことにともない、漁業も変ってきたことについて説明する。

ナイルパーチ(ラテス・ニロチカス)は、20年程前にウガンダから導入したが、魚食性が強く、食物連鎖の一番上に位置するため、従来の魚相をこわしてしまい、湖の生産自体が破壊されてしまうことが心配されていた。15年前の統計では、小型シクリッド(ハプロクロミス)が40%位、テラピア類(ニロチカ以外の2-3種)、プレトプレウス、コイ科魚類のバルブス、ラベオ等、モルミルスなど、アフリカの典型的な淡水魚相で多様性がありバランスが獲れていた。この20年間で、実際、ナイルパーチは急増し、漁獲量の8割位を占めるようになり、他に淡水イワシ(現地名ダガー)が2割弱と魚相は大きく変った。また、テラピアも増えているが、これは資源量が増えたというよりも、この地方で好まれているため選択的に漁獲された結果と考えられる。

このように、魚相は学者の予想通りシンプルとなったが、予想に反して湖の生産量は増加してきた。ケニアの漁獲統計でみると、漁獲量は15年前に2-3万トンであったのが、現在、ビクトリア湖から13万トン、ケニア全体では15万トンで、この内10万トンをナイルパーチが占めている。

最近、FAOが出したレポートによると、魚相が変化したことに対する批判はあるが、総合的に判断すると、総生産量は増加しており、漁民にとってはむしろ良くなってきたといえる。ナイルパーチは、国際市場で価格が高い為(浜値で5-8K シング、テラピアは10K シング)、フィレに加工後凍結して輸出できる。輸出先はイスラエルが一番で、他にヨーロッパ、日本等に合計8,000トン(24,000トンの漁獲量に相当)が輸出されている。なお、ヨーロッパが伸びた理由は、チェルノブイリの事故でヨーロッパの魚が食べられなくなったため、日本ではフィッシュバーガー等に使われている。

ナイロビの大きな加工工場では、見学した2工場とも規模を二倍に拡張しようとしてお

り、インド洋に面したキスム、モンバサ等でもインド系の人が大資本で加工、冷凍工場を建てて魚を集めている。

問題点としては、第一に、小規模な伝統的漁業を行ってきた漁民は主に刺網で小型魚を漁獲してきたが、魚相が変わってしまった現在、ナイルパーチを捕らざるを得なくなったにもかかわらず、漁法をなかなか変えられない点である。第二に、国際市場で売るには鮮度が問題となるため、刺網で漁獲された魚は適さない。小規模でもロングラインの場合は鮮度の良い魚が漁獲される。第三に、近年資本家たちがトロール漁を始め、現在1-2隻に許可がでて操業しているが、政府のしっかりした規制が無いと今後増加して地元の小規模漁業が成立って行かなくなる。現在、FAOが三カ国にわたるビクトリア湖の沖合を共漁海域にして企業漁業を許可することをアレンジしている。第四に、流通経路の問題として、近代的加工業者(一例では35台の保冷車を所有)が大量に買い付け販売をするため、魚の浜値も上がり、小規模な伝統的フィッシュマシーによる流通が圧迫されてきている。なお、ケニア人の内、魚食の習慣があるのはルオー族など1/3程度である。第五に、統計上雨季に漁獲量が減少しているが、これは雨季の際トラックが小さな浜に乗り付けられない為である。また、ナイルパーチは油が多いため伝統的な薫製に不向きであり、サイズも5-7kg, 10-20kgと大きすぎる。

コンゴ：西アフリカの赤道直下に位置するコンゴ(主都ブラザビル)は、石油が産出するためGNPが800ドル/人と比較的豊で、社会主義体制で競争を知らずに生活してきたためいい面が残っている感じがした。しかし、1985年以降石油が売れなくなったので財政的には苦しく、現状のまま続けていける状況ではない。人口は200万人で、約10万トンの魚を消費している。この内5万トン(海面2万トン、淡水3万トン)が国内生産で、残りの5万トンをヨーロッパから輸入している(主に冷凍イワシ、ノルウェー産タラの塩蔵品)。

このように、加工を含めた魚の消費量は、1988年の統計で51kg/人と日本人の約30kgと比べてみてもかなりの魚を食べていると言える。

コンゴにおける魚類の生産キャパシティーは、海面では海岸線が狭いものの、いい海流があるため10万トン位が可能である。また、淡水でもコンゴ川及び支流で10万トンが可能である。

今回、コンゴ川上流400km位にあるモサカ周辺の漁業を見る機会を得た。モサカはこの周辺、半径100-150kmの淡水漁業の中心地となっており、国内生産量の約半分1.5万トンが集荷され、ブラザビル等に出荷されている。

漁業は、小規模な刺網が主で、他に原始的な追込み漁、ウケ、竹のトラップ、竹竿釣などである。船外機もなく、漁具が不足している。刺網、フロート、シンカー等はあってもスペックが合わないものであった。モサカから20-50km離れた自給自足の村では、原始的な漁法で漁獲した魚を薫製に加工して、大型船が来た時に出荷する。

今後の課題としては、ヨーロッパから輸入している魚(外貨事情を圧迫している)を自国で生産できるようにすることである。このためには、漁具等に多少お金をかければ漁業は必然的に変わっていくと考えられる。なお、漁師の高年齢化(35-50才)が進んでいることも問題である。

質疑応答の後、出席者の自己紹介及び近況報告があった。

< 事務報告 >

別紙の通り、１９９０年度以降の活動方針について報告、提案があり、出席者の意見を聞いた。

１）次回研究会の開催は、７月頃、南米、ブラジル国の水産増養殖について、１５年ぶりにブラジルから帰国した井手口良一氏にニジマス等の養殖について講演をお願いしたいと思います。また、中南米での経験が豊富なＯＡＦＩＣの若松豪氏にはエビ類の増養殖について講演をお願いしたいと思います。

２）海外水産増養殖シリーズの発行については、加福竹一郎会長より説明があり、ＪＯＣＶの隊員用手引書としてすでに発行されている（非売品）＜草魚のホルモンインジェクション＞及び＜エビ類増養殖＞の２冊を、技術シリーズとして研究会より再発行する予定です。今後、ＪＯＣＶと相談の上、年内に発行したいと思います。

３）会員名簿の改定版を作成中です。７月頃の発行予定です。
住所変更等がありましたら、事務局まで連絡下さい。

４）事務局の運営方法に関しては、勉強会の幹事を決めても定期的開催は難しいことが予想されるため、会長の方から反強制的に次の講演者（会員以外も含む）を指名し、少なくとも３ヵ月に１回は開催するようにする。会報の発行は、従来通り事務局が行なう。また、会場の確保も難しいが、木谷浩氏よりＪＩＣＡ国際協力総合研修所も利用できるとの申出があった。

５）会計報告

別紙の通り。 会費の納入については、次回の会報発送時に連絡します。

６）会員移動（１９８８年度以降）

入会：牧之内貞治（海外漁業協力財団）	小林次彦（泰東製鋼）
兼古正治（ザンビア国ＪＩＣＡ）	永井安豊（日本配合飼料）
間宮章一（ネパール国ＪＯＣＶ）	平岩盛孝（日商岩井）
松里寿彦（イタリア国ＦＡＯ）	永田豊照（函館製網船具）
久米恒夫（フィジー国ＪＩＣＡ）	若林直樹（日サク）
升田清（アメリカ国留学）	島津祐右（極洋）
佐々木直義（国際協力事業団）	木原興平（東京水産大学）
小林清春（メキシコ国）	曾根重明（国際水産技術開発）
寺井充（南イエメン国）	伊東京子（フィジー国）
退会：上田修一郎（三井海洋開発）	岡田徳男（ＯＡＦＩＣ退職）
片田実（片田栽培漁業コンサルタント）	木村真樹（緑書房）